中村俊定文庫
文庫 18
255

元文五庚申
貞佐七回忌追善（享保元年）

拾乃碓

（抜粋）

其磯序

元文庚申のとし九月十二日は我師東翁の七回忌也。今さら光陰のはやさにおどろかれて。さらぬ面影をなけかるいとよそ。誠に其德のひろく。その恩の深き。いかに報するとしつきせさらむや。さるを万部の誦経より。一巻の訓誡こそ。風騷の道の大法事なるに。其教はつとめて傳えやすからむし。其德の述て弘めかたけれは。こしは社友手初にゆねて。行狀の大むねをしるさせ面相のあらましを忍

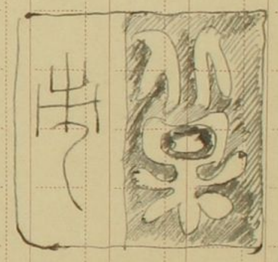
かしむるは。我寮に礼拝の為ハまして。旧知に田向の便ならんとなり。されハ言流の塩梅ハたくとも。作意の所味を手向として。なかく師名を照すへき荘厳の心とこいはん。さてやハ其記にいへることく。芝師八度の選集の中にも。ひとり代々春の全倚なる。それを言の葉のたねとなしつゝ。春の初子の玉箒より。まゆひく芝のながき日をいとなみ。（大東京交通チエーン特製）斯機しの工ゝして見れば。いかにもあらきぬのあしく多く。誰か庭寛の巻ひとならんや。より

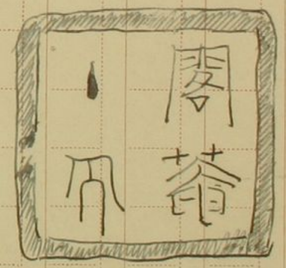
て石家の錦、綉をもとめ。あやあるかさりといのひぬ。院に楊木に槌うたせて。千声万壱のいそぎするも。ふたりが不拍子の名より起れば。其きぬたとゞほのめかしける。我師寂光のうてなにありて。今や吠音を聞ぬらん。有明の月の雲のはたてに。便あらはとおもひやるゝみ。（上ニテ）

時元文五庚申載秋九月日

北梅市露菴主富岡有佐

謹叙





（大東京文具チエーン特製）

早稲田大学図書

其砧

桑翁行狀記

皋平砂

抑我師ハ東武に生れて。風雅を四方に及ぼせり。されば其はしめの名を塩車といひ。其字を永房といふ。素〻時と樗するものハ。素岡の氏によりて。後に狂したる號なるへし。貞享丙寅のとし。春の始か。晋師初懐紙をふところにして。かたへの書店に来たりし時。我師に

中村俊定文庫

亦そこにありて。ほかからずもま見之侍りしよし。常にかたりゆされしが。是れ入門のはしめなるらん（時に葉翁年十五）かくて手砌の名を得てより。

萩の露の道場につらなり。（時に二十一）日夜に吟ずをくるしめて其流法を学へりとそ。さるを其頃の試筆にも。手ことの色今日を初めりハ。

吾師が星月夜といひし年なれば。祖翁も武陵におはしりむと。其代の風姿ゝたはしさに。（吾子元孫ゆゑ句帳、翁之伝合刻。往し。文保元年歳旦に有、佐和山、再板而出）手の奥やまた飛込む故生会ハ。一十竹があめりける延命冠者（大東京文具チエーン特製）

の余無なりけり。（元禄十五年）しとより是非の境に居らす。栄辱のちまたをはなれて。花の袂を墨になすより。了我法師といふなめり。猶風雲の庵をさだめす。東西の旅にたゝよひて。

ある年は伊豆の山寺に隠れ。あるは宮古の片にいたりて。こゝる庵をむすはれしに。

道坂い我に退たる清水哉と。さすがに美麗の地にひかれて。しはしい閑素をたのしまれたり。所からさそひし友ありけるが。夏の関路のわかれをおしゝ。（上略）暁の空をうらみてや。晨

鶏載鳴残月没といひし。白氏かことばに思ひよせて。一香鶏の一集なりぬ。扨うち續きて二香鶏。かつて住つかぬ心より。又ふるさとのなつかしとて。あづまに歸る其とし二そ。聖廟の御忌八百年。又西行上人五百年。宇治法師二百年。夏徒象の五十年忌に当る(元禄十五)。壬午を(壬午)の(馬名馬道)のいみじく。その跡をしたはんにハ。此時こそ幸なれとて。吾師誰かれと相はからひつゝ。夏佐と改ることになりぬ。さハかの集ハ鳴をむるより。吾師没後に

(大東京文具チエーン特製)

及ひて。狂而堂の遺稿を撰して。まず新奇をいひあるゝ。句数ハ盃の数によりて。桃李園の罰さへあきを。癖は酔の徒りとて。木賀芦の湯にやすらハれたる。自然に新山家の趣といはん。(集名を泉一編祇空子之第跡)あるハ鶯の聲に誘はれて。身延の里にあゆむく時ハ。甲斐のたら根のたらゆくまゝをさぐり。ふたゝひ都の春花に遊へり。(作春夏賦の徳六丙申に出)あるハつくばねのたゝミをわけんとして。かミつけや佐野に駒をすゝむるより結城に部屋の一声をひいかし。

すでに二ヶ月の風土記を詠す。作ニ他村ノ享保五庚子

よ生、泥を旅にくらせし。古人の反のひとり

もいはむよ。山雲水れんのうるはしきより。田

家野店のいやしきにいたりて。無量の趣きを

むむへしとか。扨とよ吾師の意を迎て。萩

の露を再板し。十五夜の仏。一百韻。十七年の

数に對し。姑て偏集の手向いなしぬ。作ニ其拙ノ享保八癸卯

春とあけ秋とくれて。いつしか五十ヒニとせ

はかりになん。朝なゆふなの事につけてヒ。

やゝ老衰を覚ゆるほとにそ。されとヒとしこ

(大東京文具チエーン特製)

とのたひ寝はかり。我身に老ふる一例にして。

其うき情こそわすれやらね。今又東海道の一

すぢなりとも。せめて生前の名残とせん。

伊勢の神の招きすれはや。此春い猫背、ろ

なりとて。さしわたさは山田の櫻桜(撓)三十里と。心

の駒にむちうつより。みやこ難波に凡骨をく

たさ。あまねく武陵に洗達を振つて。扨こそ

代て春の秋備をなせり。文保十一年丙午十月にや坎門にし

たかふしのは。なを氏いとくらにたすりて。

縦横のあやを知へしとなり。化迅にしとし月

の門弟。他の選集の序に進み。老をたすけ。
荒さをみちひき。世にふる巻もいくばくぞや。
いまや都、鄙遠近にわたりて。吟行の金言絶は
てたり。又唯先師の句くを先とし。甚兄に宜
しくして。弟、譲の心をむすばんをそ。恩報
の終なんと。梨の園の四ツの巻に。二十五回
ハとひやされき。享保十六辛亥年その年の暮なりし。本
卦にかへるとしを待ては。遠くも父母をおも
ひ出べく。かくてハ老をことふかむとて。紋枝
を我親雑煮椀と。其俳に引かへつゝ。心にし

(大東京文具チエーン特製)

たハるゝわりなさ。これらもあはれのはしな
りけるに。すハやニとせ三とせすぎて。六十
三の秋の際より。日こゝに地わつらハしく。た
のみなきことのこかさなり。終に末の秋中の
二日。此世の息たえはてゝ。自粥の一句をか
たみ迄なしぬ。入つとふ門人知己。悲歎のお
もひいふはかりなく。既にかつしかの平河山
に葬て。秋の木の葉の露芝前に。むなしき名
のみあしみしを。墓さへ他しき田面にむかへ
は。ちをさら其影を思ひれ侍る。いてそれ此

翁は。四十餘年の労をかさねて。精神を風雅に傷らるゝといへども。功名いかの八部にとゝまりて。なんぞ百世につたいらさらんや。

右ハ先師ノ夜話ニモトツキ諸集ノ時代ヲ考ヘ合セテ其事ノ先後ヲ推案ス先ハ選集ノ功ヲナラヘテ是ニ師名ヲアラハサントウ是一章ノ大意ナリ。

（大東京文具チエーン特製）

追福歌仙

身にしるや今はた四方の秋なから　有佐
畔に並んて稲穂さ生る　祇丞
負相撲負にからめ月夜にて　筆端
印籠にさゝへ手を喰れけり　其川
上段を見則て旅心　手砂
芋ふ茄子のまた笑もなし　執筆（九オ）
瀬戸物にロ近ゝ詩の一件　丞

横へ亂の上る　甲子　佐

腰をすり揉り拳のたをやかに　川

表座敷は外に同前　端

何時とそらにしられぬ鳥の糞　丞

今年ハ盆の敲きれもの　砌

高くより素人目には水の月　佐

下戸あさましや秋渇きとて　川

あいつめかす十五にならは草の庵　端

花の卯の分事い間事　丞

蚕種はしめて鉢を嗜めら　砌

（大東京文具チエーン特製）

二三度風のかはる長い日　佐

ナ

佛像は碇のうけの似たりけり　川

人にこなれた女部仲麿　砌

夜い明て碁の音寒くほとゝきす　佐

卯の花くたしつゆにさゝたれ　端

三河路や高野聖の得意あり　丞

燈さへともさす馬孫に行　川

明星い人相のよい女様　端

頃日着た衣に請られ　佐

あたまから迄のうら迄したいるす　砌

海鼠の中に之芭蕉の句見　丞

茶の葉に月の音聞雨の巷　川

名酒陶いわけてつめたし　端

職人の長いか瓶といひ傳え　佐

柏手三つな篠相なるへし　砌

すちかふて朝日の遅き川向ひ　丞

起ふと牛い呵られるもの　端

花しらん為に茶をつゝ新を刻　砌

心に解る青柳のいと　川

(大東京文具チエーン特製)

懐舊之句

来ゝ白粥満りと一句をのこされしは

既に七とせのむかしかたりとなりぬさる

かゆに炊史い我門の誂祖にして甚いと

くちゝたれす片いとのわれら近とゝ

により合せて糸車のたえずめくらむことを思ふ

今ゝその紀念に照や後の月　祇丞

来ゝ畔の主人ひろく風流の名に栄へ

たりしされは其恰たる日〳〵月〳〵に

翠きをや今年有手両子懐旧の一冊

をふすに予も此道の流にしたか

ひて益故人の老をあふく

それよりハ我も七年暮の秋　筆端しるす

師我に安摩羅果をあたふ実に誹諧

の甘みをしれとなりしに今やわれ

世に打たり

ありのみやまた梨の名のあれはこそ　雅川

（大東京文具チエーン特製）

いまハむかし或日貞佐来て予につく部会

の句まふけたりと自讃せしに亦おもしろ

りぬるよと思ひ出て

秋今年冬そ一日しる　凡　鋤鱗

往事雲千里

高れ山一丘

桐の葉し雨を待ち戸の音　潮朝子

恐れもしらず高く出　有佐

つつ伏夜千しなく月に蓑果て　沈山

百之　其慶　梅枝　等歌仙あり　略

来し時与佐長士が風雅を愛し世のゆるす事
なれはいかゝ安更て子あの門に逝ふといへとも
良侍為命のいとまあさによつて志もむあし
すゝき今はた七年の光陰とかれはたゝ股をい
ため往昔を思ひのこし多き露菴こゝ長月
七めくりの遠忌を迎て目出る追福の一座をむむ
露菴猶古里のしたしこに同しけはすに為捨
の人くにこひて寄伝とたゝ郁有を憶伝ること
しるす
指を折年の積りやきさらゝす　冠之

（大東京文具チエーン特製）

千回りやこゝろ作の猶のかさ　立甫
其時（寄る）手初　有伝　祇丞の歌仏あり
京家帥の七夜に狐庵子ハやゝ八十餘日
鳴たつや壺巡人の後影　松岡
来し時の為七回をむかへて古今庵へ中あくる
香一炉庫裏い柚ふえて炬けり　湖十
初厂の猶めつらしやいなりゝ　昌北
あしこゝろ寄さ迄えて菊の華　木髮
千鶴（寄る）有伝帝山等寿帝子昌北長鶴の
歌仏一巻あり

草を出て月は武蔵野の月釘の穴　李寥

草の葉上に玉しかとする　与佐

夜分まはる　鼓の音を聞て　長水

与ばる瓦の今に悪くさよ　素丸

十とせ経める七句こは各自筆執て記せ

るせ十人の酬和人をといふに引あて

是は四人のうちもたるも　と哀にあはほ

之て

吟手一手に葉の上に露の雨　李寥

報恩の氏社樅樟七年忌　調和

（大東京文具チエーン特製）

偶ま成俗になる月やはら影　千家

次下有伝　基道　有林　吟嘉　文佐　素夫　佐水

平砌　九吟彩伝一巻あり

幸に呼疑ぶまゆうこ三氏一座俳談せ

夢とたゝはやセめくの年月平砌家匠

昨のあとを追福したまふ古と　此時此地に

ちくと此集まましいるこれあしさの偶ぐこと

に凡雅をたゝ行次すし

其人や今がなくとも　好の月　千爲

こしみたを　和のそあやは好の月　未仲

社風や芋を捨たる夜の霜　柘造

子持ちしかみ出でや大踊　三升

物毎の濡るいやしナ三絞　宋阿

寒く呼の吟竹まうちうしれさしてほとゝぎすの夢の滅　雪好改立丸

夢の香や菊に孤しして冷酒　

菊水や花に弱れて水の泡　見就

寒く呼ハさ足芥翁の記大体く子と

ゆ呼の風をしたひ見ちかしの紅を訪ふ

月の沒技不明の手かし　外　風和

いふや我とふ居も艸の色　家　富鈴

（大東京文具チエーン特製）

七まとひ這廣こるや蕉めつら　露丹

名月や国扇も毒を捨られず　話林

（下巻序）　上巻三十四丁半　次上上巻技物

貫鳥をもうハ無一本と必へ承　傳成一傳

敦月下ノ門有徒をハ了我といへ承

傳成し又一敦月下ノ門在造朝便よ會

ありし了某一興且角いたれり近德先生

いとゝり近德いへり了我必たゝ人俗とふ

す〜ノ朝便よ兼てをりして俗衣数を

支度をして思ふ事角すしく於是
二子相談以て稱名直佐に碑に其角門人にて
から法德親切なるかゆへに物故して
法德と同じく小碑を建立の也時多く其到とす
春の夜の設して詩昔しの尊呼七面なる
か那

弋鳩林　午寂翁

三姉居
世昌氏之印
（大阪京文具チエーン特製）

むらさきに身を投出すや菊の高　紀逸

遠慕　家菴連

小鳥ゑ二ほれやすさよ菊の花　花千
白菊の枝佛にうるひ洞かな　野水
旅にしさ日あり秋の海の秋　親子

後序　柴永

春之花故り而、雨子地鳴秋之月傾ナラ而、翁之
衾一夜止四一時之変化人間之栄枯厭好如斜
縄今ゝ者七年之昔し詩也年之地卯夏翁球所

謂中樓余為母粥一句而終如眠也止毛焉
岳月之永来別悠者也慨上在左則焉門余有
三子者而其志之爲ニ風雅習都後浚奈
者更也彼蔵子舞雪ニ和毛爰不言ハ曾一點ヲ振量ヲ
埼而不求子ノ意カ行キ過ヲ者ノ減ノ後毛堅守ラ遺
命ヲ而相睦和ニ自雪之曲有左中余独蒼者
詔ヲ吉年之初秋之霜ト而改ル一道之契ヲ者
今也有平之丙子爾氏ノ集余抜キ基ノ深ヲ而戒訓
師恩ヲ上或不忘ニ後ノ年ヲ世所鳴呼吁ノ哀蒼
化之地也爲社中故人後上幸ニ余丙子健カ也別恩

(大東京交易チエーン特製)

出昔厚ヲ今而尚慕七尺ノ影居草感三世之縁而
自他ノ咏吟集若干吾儕人不知余有如之戸爲後
序ノ主事嵗可笑計連登繰ニ知己ノ一筋而染筆ヲ
ヲ茱萸ノ几上侍利奴
定保辛丙ノ秋九月

葛飾ノ傍邨舟橋ノ住
六味翁誌

白雪
内用

No.

（大東京文具チエーン特製）